

飛鳥

2011年

春号

第172号

かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所

飛鳥出版室

発行人 永野 正将

〒780-0945 高知市本宮町65-6

電話 088-850-0588

e-mail: info@asuka-net.jp

http://www.asuka-net.jp

飛鳥「かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。



五台山の枝垂れ桜

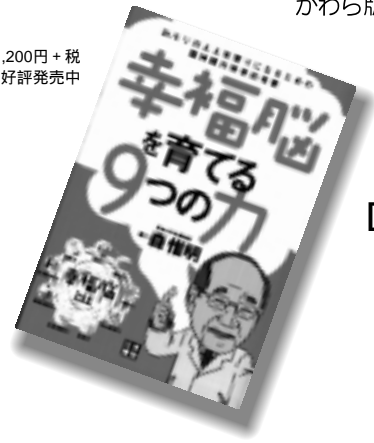
東日本大震災で被災された皆様へ衷心からお見舞い申し上げます。一刻も早く安心できる状況が訪れますよう心からお祈りします。

生いつまで桜をもつて日を包む

橋本多佳子

かわら版172号・紙面	『幸福脳を育てる9つの力』
森 惟明 2・3	
出版物紹介	
セカンドライフも真剣勝負	4
芳乃の哲学上	和食仁志 5
文章力レベルアップ講座	大西志津 6
いろいろかいる四	水木和香 7
ヒナタクサイ日記	安藝真一 8
やまげんらう	9
キルギスタンからコンニチハ	氏原名美 10
わが家の太郎筈	永野雅子 11

定価 1,200円 + 税
全国書店で好評発売中



Dr. モリのええ年寄りになるための脳神経外科科学的考察

「幸福脳を育てる

9つの力」

(日東書院)

出版おめでとうございます



森 惟明 先生

高知大学名誉教授の森惟明先生は、専門分野での多数の著作本他に、大学退官後も『来し方を整理する』(2000)、『健やかな第二の人生をめざして』(2004)を弊社から出版。同時に2003年からはメールマガジン「セカンドライフ支援講座」を毎週7年間に亘って、第二の人生を豊かに過ごすために必要な病気の予防や治療に関する医学的情報を発信されています。

そんな先生の新著は、サブタイトルに「Dr.モリのええ年寄りになるための脳神経外科科学的考察」とありますように、脳神経外科医としての体験を通して実感・実践されてこられた森流「幸福脳」を育てるヒントが満載の一冊となっています。

「幸福脳」に必要な9つの力 賞賛力、

傾聴力、謙讓力、忘却力、現状受容力、社会貢献力、生活設計力、対人交渉力、自己啓発力 については各章で詳しく解説されていますが、1つでも育てるのはたいへんかも…。

そこで、常に前向きでポジティブシンキングのその秘訣を微少なりとも知りたいたと、お尋ねしました。



「人間の幸・不幸は、環境でなく心(脳)が決定する」と、先生は言われていますが、心(脳)には環境に打ち勝つだけの計り知れない力があると思われませんか？

潜在意識の持つパワーは計り知れないものがあります。人間は自分が

こうなりたいと強く願望し続けたら、必ずそのようになれると考えます。肯定的な言葉を継続的に潜在意識に働きかけると自己洗脳がなされ、達成したい願望が実現することが実証されています。

前向きで肯定的な生き方は、脳に反応して自分を思い通りの方向へ動かす力となります。



先生は、折に触れ寺社仏閣を訪ね、良き脳神経外科医であるためのヒントを得てこられたということですが、具体的な説明をお願いします。

困った時に人は神に祈るものです。多くの人が病気になったとき、快

癒を願って寺社仏閣に参拝し祈ります。そのような祈りの場に身を置き立場と医療に対する謙虚さを自覚させられ、同時に人々の願いを叶えられるような医師になるよう一層の精進をしなければならぬという思いを新たにさせられます。

人は「賞賛によって無から有を生ぜしめる」ことができると、賞賛力の及ぼす影響を説かれています。賞賛の力とはそれほど大きいとお考えですか。

賞賛すると言うことは、自分と他者との関係を突りある豊かなものへと発展させる力をもっています。褒めることにより、より良い人間関係が構築できます。

とくに、人を育てるのに褒める事が大切です。褒める事により人を動かす、やる気を起こさせ、ゼロからスタートした人を専門家にまで育てることが出来ます。

先生は、自らの来し方と行く末に関する思索の重要性を「個人の抱えている悩みを解決する近道だ」とおっしゃっていますが、思索が実際どのようにして悩み

の解決に結びつくのですか。

この世に生を受けるといことは、極めて稀にしか起こりえない、有り難いことです。この世に唯一の自分の存在に感謝の念をもつことが出来れば人は自ずと幸福をもてるようになり、人生の意味と価値を知ることができるようになります。

自分の来し方と行く末を考えると、自分の人生が他者とのつながりと関係性の上になり立っている事を知れば、悩み解決の道も見えてきます。

先生のオシャレは定評のあるところで、これからも「オシャレを楽しむことで自分の既成の価値を壊してみたい」と。熟年世代にも価値観の打破が必要だと思われませんか？

趣味は生活に張りを持たせてくれます。人と会うのに、どのネクタイを締めていこうかと考えるのも私の楽しみの一つです。

若い頃のオシャレは主として外觀が主体をなしますが、熟年となったこれからは質の高い心のオシャレが大切だと思います。美しいものを美しいと感じ取り、

価値あるものに対して対価を払えるような心を持つようになりたいと思います。

世界でもトップクラスの長寿国日本折角の長生きも、その質を問われるとどうでしょうか。少子高齢化難待たなし軌の今、高齢になっても、身体的不自由があっても、心豊かに暮らすためにはそれなりの心構えが必要のようです。

高齢者は加齢に伴う身体的能力の低下がみられるとしても、生活習慣を変えることにより潜在能力を呼び起こし、自分の置かれた環境如何にかかわらず「幸福脳」を育てることが出来るものと考えます。

「幸福脳」を育てることにより、「生・病・老・死」という人生の険しい山坂も、まるで景色を楽しむかのように全てを乗り切って行けるものと考えます。人生は人に勝つためではなく、天から与えられた能力を発揮し、人のため、社会のため役立つ人間になるためにあります。

Dr.モリのように、苦境にあっても強い心で、笑っていられるようになりたいものです。お答えありがとうございました。

出版紹介

歌集 流氓のごと

B六判 二〇八頁
著者 石本幸美
発行所 飛鳥出版室
非売品 (海風叢書第十篇)

この世に生きて証として歌集を出すようにと、先師国見純生に言われつつけてきました。が、なんとなく踏みきれずにいるうちに、老々介護の身となり、並行して師の体力も次第に衰えその機会を逸し、やがて師が、つづいて母が世を去りました。いつかは来ることと覚悟はしていたも、人生の無常が身に沁み、悲哀とも虚脱感ともつかぬ茫然たる日々が流れました。初盆を済ませ、一年忌が過ぎ、母の納骨を終え、三年忌も過ぎたころ、ふと父母の鎮魂のために、またわが人生の締めくくりとして、これまでの作品を一冊にまとめてみようという気持ちになりました。(「あとがき」より抜粋)

水仙の花あまた咲く川べりを
流氓のごと歩み来たりつ

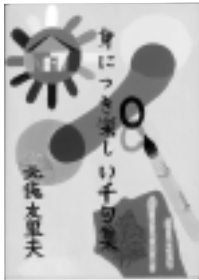


身につき楽しい千句集

四六判 二一〇頁
著者 元徳友里夫
発行所 飛鳥出版室
定価 二二〇〇円(税込)

もともと体の弱い私は、二十三歳の頃、職を失い体調をくずして、すぐにふとんに横になり、テレビを見るくせがついてしまった。(中略) 小学校での先生に教わった俳句の授業がよみがえり、ひまつぶしに俳句を書いてみようと思つた。そしてできたのが、「水仙や 花に見とれて 十一輪」という単純な句であった。でも自分ではいい句ができたとおごり気分、母に口で詠みあげると、「いいじゃない」と誉めるような返すような何とも言えない感が伝わってきた。(「はじめに」より抜粋)

一気に詠んだという千句は、明日への希望につながる道標かもしれない。表紙も自作で俳句や川柳をつくる楽しさが伝わってきます。



写文集「自然と語る」

裏磐梯をゆく
200×220ミリ 六〇頁
著者 島本葉子
発行所 飛鳥出版室
定価 一五〇〇円+税

裏磐梯とは、福島県の北部にある磐梯高原の呼称。島本さんの切りとつた一瞬からは裏磐梯の風のそよぎ、光の煌めきが伝わってきます。美しい秋の裏磐梯を訪れて、撮影三昧の幸せな一週間でした。自然が与えてくれた数々の感動を皆と分かち合いたく作ってみました。一方では、山を切り開き住宅団地や工業団地等があちこちに造られています。大量に降った雨は森林の落ち葉に沈むことができず一気に川に流れ込み洪水となって災害をおこしています。これは人災です。それと知つて、知らんぷりして、ただ自然の恐ろしさを口にしていられるのでしょうか。(本文抜粋)

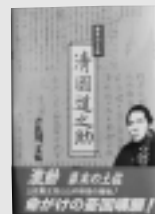
感動して、
そして、私
達は考えな
ければなり
ません。



祝・第55回高知県出版文化賞受賞

『幕末の土佐 清岡道之助』

(飛鳥出版室)
吉良川文張



A5判 292頁
定価 1800円(税込)

県内書店にて好評発売中
さる二月十九日(土)、
県文教会館で棕庵文学賞
・寺田寅彦賞との合同授
賞式がおこなわれました。
武市瑞山を救出して、「尊
王擾夷の再現」を夢見る
二十三世の先頭にたった
清岡道之助は、野根山に
歎願決起するが捕えられ
斬首。
「郷土史」を漁り始めて
から二十年の歳月を費や
した本作品の受賞を関係
者一同でお祝いしました。





初版 1999年発行
定価 本体1,200円+税

五刷になった『息子は人生最大の友』著者からの近況報告

セカンドライフも真剣勝負

和食 仁志

歯切れのよい語り口調が懐かしい飛鳥出版室OB・西村さんの強いススメがなかったら、また、河野さんの優しくて地道なお世話をいただかなかつたら、私の本の出版はなかつたかもしれない。当時からためて懐かしい。

いざ出版されてみると、私から離れ独立した一つの人格のような存在と感じられたこの本も私も、十二年の歳月を経て、本は十二歳、私は六十三歳となった。

臆人づくり軌に志を定めていた私は、五十歳代半ばから人生をチェンジして、講演研修講師・人づくりアドバイザーとして全国域を飛び回っている。日本の三分の二以上の都道府県に足を運んだ。日数を計算する(往復に費やす日数も加える)と、これまた年間の三分の二は高知を離れているという現状である。不思議かつ尊い出会いは全国のあ

ちここで次々と生まれる。これが何よりの元気の源である。それは主催者や受講生のみではない。例えば、歴史作家として有名な童門冬二先生(84歳)とは研修の役割を互いに前後で担ったりするうちに、「高知の和食」として顔を覚えていただく間柄になった。

私の今の仕事は、一匹狼としてやる、代役がきかないプロの仕事であり、相手の満足と引き換えに対価やリピートの誘いをいただける。その日、その時間、その場所に、確実に自分が立っていないと事は成立しない。今日の高知が仮に台風であつても明日の新潟にはキッチンと居なくてはならない。

高知の自宅に居る時は、近所にいる三人の孫が訪ねてきたり、介護を要する父がいる関係で妻の代わりに料理をつくったりしている。が、いったん研修資料づくりに向かうと、

恐ろしいくらい目の色が変わっているとは家族の弁。仕事先に向かって高知を離れる時は、スニーカーとジーンズでの旅のような心境ではない。明日の本番にむけて、手前からテンションを上げて臆流れ軌を作つてゆくこともプロ意識に徹すれば楽しいものである。

講演や研修の演題・テーマは、当然私らしさを期待されるわけだが、大体次のようなものである。

- 臆人間力の向上
- 臆役立ちの精神
- 蘆幸せな人生を創造する
- 蘆無縁社会を憂えて
- 蘆経営の成功に不可欠な

四者満足の視点

- 蘆リーダーの価値観・人生観
- 蘆職業人の志(し)について考える
- 蘆新人の世話係(せわがし)の役割・心がまえ

講師プロフィールには、著作『息

子』が記載されてはいるが、本を会場で売るとは全くない。ただ、幾つかの定番研修の副教材として毎年活用させていただいたり、貴い出合いをした研修事務局や受講生の求めに応じて贈呈したりしつつ、この度五刷目を迎えた次第である。

一つのテーマで二時間から四時間の話をする、第二弾の本をぜひ書いてください」と期待を寄せられる。そんな時は、「私が死んでからのことだけど」と前置きして、

「公私で深い関わりのあるた人生の後輩たち一人ひとり、二頁ずつ私との出合いや思い出、学んだ事などを書いてくれたらベストセラーになるかもネ(笑)」

「早く読みたいかい?じゃあ私は早く死ななきゃならないネ」と土佐の男らしく豪快に笑つてオチとなる。(わじき ひとし/高知市)

芳乃の哲学(上)

大西 志津

昨年未、須崎市の大西さんが「明治生まれの一人の女(母)の七十年間の生き様を羅列してみました」とお送り下さった作品です。
年明けの一月末、その大西さんの突然の訃報を知りました。託された文章を、一回に分けて掲載させていただきます。

芳乃は、明治四十五年六月、加茂村(現佐川町)に生まれた。

時は、日清・日露戦争に勝利した日本が、富国強兵へと国力を強めているときであった。芳乃の家でも「産めよ、増やせよ」の政策のもとに生まれた十二人を賞して、明治天皇、皇后両陛下の御真影の隣に、子宝賞の立派な賞状が納まっていた。正直で真面目な働き者だった芳乃の両親が、貧乏人の子沢山にたがわず、二年ごとに規則正しく神から授かった命は芳乃が、十二人の弟妹の長女となっていた。

貧乏人とは悲しいが、芳乃の祖母はいつも丸まげを高く結い、お齒黒に染めた口に、長キセルをくわえ、大きな長火鉢の前に座って、スパスパとタバコをくゆらしていた。その日も猪口ちとこに一つだけの酒を舐め、「ああ、うまかった」と言っただけになっただけだった。祖母の没後に、屋敷は火を出し、田畑も家も山林も

失い、僅かな田畑のみの自作農になつていった。

芳乃は、二キロほど離れた通学路を、背中にも両手にも弟妹を連れて通学した。勉強は嫌いではなかったが、四年生頃から窓の外に聞こえる先生の声だけでは、次第に授業についていけなくなった。

それでも芳乃は、「読み方」は好きでよく覚えていた。娘たちが大きくなってからも、千早城や義経のひよどり越え、桜井の役、壇ノ浦の戦いなど、夜なべをしなが、娘たちに飽きることなく語りきかせていた。

芳乃の子づれ通学は、尋常小学校六年で終わり、卒業した翌日には子守奉公に出された。見たこともないおじさんの後をついて歩き、奉公賃は一銭(今の一円の百分の一)も手に渡されることなく、両親に先渡しだった。荷物は、半幅の赤いネルの腰巻と、緋の膝上までのちんちくりんちんちりんの着物だけを風呂敷に巻いて、斜め

に背中へくくりつけての旅立ちだった。会話もなく、うなだれたように歩く芳乃は、加茂から高知まで歩いて船に乗った。波に揺れる船、暗い夜の海など、行き先もわからぬままの初めての旅は、どんなに不安で悲しく恐ろしい事だった。やがて夜明けに着いた所は、船や家も人もたくさん居る所だったらしい。芳乃は、自分が居る所も分からないままに、子守奉公人になった。娘たちが成人してから、神戸のことを、何度どんなに聞いても、芳乃は貝が口を閉じたように、「忘れた」というだけだった。

ただ、日本中が「おしん」を見て涙を流し不都合に怒り、同情している時、ポツリと芳乃が「あんなものじゃなかった」とつぶやいたのを耳にした娘たちは、芳乃の傷の大きさを知ったようで、その後は誰も神戸の話はしなくなった。

やがて、音信もないままに、一年の年季を終えて、土佐市の谷地の農家へと子守奉公に帰った。我が家で休むこともなく一年契約だった。朝暗いうちから日が暮れるまでの一人だけの子守奉公も、楽しくもなく悲しかったらしい。

三度目は、現佐川町の森田家に雇

われた。旦那様は文筆家で、ほとんど東京暮らしで、本宅には奥様と坊ちゃんがいらっしゃった。今までの二年間とは全く違い、芳乃にとつては、生きる力、喜びを与えてくれた毎日だった。

食事の準備も奥様に教わりながら台所に並び、同じ部屋で同じ物をいただく、生まれて初めての経験だった。

また、何よりも芳乃が嬉しかったことは、坊ちゃんが天才的なハーモニカの才能の持ち主だったことだ。芳乃が見たこともない小さな楽器から、一度耳にしたメロディーを何でも吹いてくれた。芳乃はよほど嬉しかったらしく、何度も何度も娘たちに自慢した。特に「天然の美」を、六十歳過ぎてても黄色い声で歌っていたことから、よほど好きだったようだ。

森田家で教わったことは、芳乃の人生の全ての基礎となったように思う。料理、縫い物や編み物、読み書き、家事のあれこれ、言葉遣い、掃除の仕方、洗濯物の干し方まで、娘たちに、時には厳しく教えた。

やがて三年が過ぎたある日、芳乃は縁あって、佐川の国鉄職員だった利雄と結婚した。利雄二十六歳、芳乃十七歳だった。日焼けして色は黒

「伝えるための道具」



水木 和香

「文章サークル」主催
第1、3水曜
18：30～20：30
tel.fax 088-834-0441
justwait@livedoor.com

文章が上手く書けないと恥ずかしい、頭が悪いと思われる、そんな悩みを口にする方がいます。

良く書こうとすればするほど、具体的にどう書けばいいのか迷ってしまうというのです。そんな時は、最低限何が伝わればいいのか、を考えます。それが結論となるように、文章を組み立てます。

カッコ良く文体を飾り立てるより、骨組みをきちんと造り、確実に結論に導いて行くことの方が大切です。どこかに素敵な文章表現が転がって、それを書きさえすれば文章が上手くなるというものではありません。文章がどんなに流麗であつても、結論が曖昧だと、結局は印象に残りません。

ビジネス文書を書く時に、言いにくいことがうまく伝わらないと不利になる、と考える人もいます。特に外国の方にとっては、日本人の文章は何を言いたいのかが分かりにくいようです。結論が明快ではないからです。前置きが長い、言い訳が先に立つ、そんな文章は、むしろ悪文と評価されてしまいます。

表現力不足は語彙が少ないためと思ひ込んでいる人もいます。もっとと読書をした方がいいでしょうか、新聞を読むべきでしょうか、

真剣に尋ねられることもあります。確かに少ないより多い方がいいに決まっています。でもその言葉を自由に使いこなせないのなら、宝の持ち腐れでしょう。めったに聞くことのない難しい言葉を並べるより、ふだん使っているやさしい言葉で表現するように心がけましょう。伝えたいのは言葉そのものではなく、内容です。文章はあくまでも心を伝えるための道具なのです。

学校で作文を書いた時は、誤字脱字がないか、主語述語の関係は整っているか、「ですます」調と「である」調が混じっていないか、助詞の使用方は正しいかなどがまずチェックされ、内容の面白さは二の次でした。そのため文章を書くこと自体がとても難しいもののように思われ、苦手意識を高じさせてしまった人も少なくないようです。

でも文章を書くことは、絵を描く、歌を歌う、曲に合わせて踊るのと同じで、自己表現の一つ。本来はとも楽しい創作活動なのです。もっとも自分の思いを文章で表現して人生を豊かに彩っていただきたいと思ひます。

(みずき わか/高知市)

く、がっちりした利雄はこわそうだった。

結婚一年足らずで、利雄が愛媛の菊間へ転勤になった。幸せな森田家での生活から、何もかも不安な借家住まいを始めた。森田家や同僚たちからの祝いなどで、何とか初めての給料日を迎えたが、利雄の持ち帰った給料袋には、一枚だけ購買(キヨスク)の計算書が入っていた。主な食料品や衣類などは、前借で手に入つたが、家賃や光熱費などは借りられない。十七歳で家事のやりくりをしたことのない芳乃は、どこからも収入のない生活から、「女房は、おかげ代だけは働かにはあ」と心に決めて内職を探した。

幸い菊間はタオルの生産地に近かつた。また、芳乃は手先が器用だったので、すぐに内職も見つかった。タオルの両端くりだった。寸暇を惜しんで働くうちに、年末に長女愛が生まれた。愛は虚弱で、いつもヒューヒューと息を切らしてよく泣いた。芳乃は泣く子をあやしたり背負つたりしながら内職に励んだ。

次第に腕も上がり、慣れたと思つたら、翌年の春にはまた転勤。今度は、待望の高知県長岡郡天坪駅工区(現大豊町)の所属になった。

(次号へ)

● 京都

● 福知山

● 鳥取

安藝真二の

しるし
いろいろ
いろいろ
いろいろ

「福知山の夜」

その四

● 下関

或る年の暮近く、鳥取の友人から便りが届いた。結婚が決まった、早春の二月に地元で挙式とあり、披露宴の招待状が添えられていた。

正月も過ぎて如月、京都駅に鳥取に向かう福知山線の列車が入る。タラップに雪が舞っていた。喘ぎのほろような軋みを続ける夜汽車の窓に白い雪片が打ちつけられて飛散するやがて、いかにも難儀と云う溜息をつく様に列車が停まった。「ふくちやまああア！福知山！」と声が交叉し、車内放送が出て「福知山でございます。駅には停車いたしました。降雪が激しく、運行に支障ありと考えられますので、しばらく停車いたします。いつごろの発車になるか今の所、全く判りません……」

予約していた宿に遅延の通知をすべきだと車外に出た。雪女に抱きつかれたような寒さに震え乍ら公衆電話を探す。ホームの端が塀もなく駅前前の辻に地続きになっていて、ぼんやりした外灯の下に電話ボックスが見えた。と、中から誰かが出て来たので、空いたボックスに飛び込んで受話器を取った瞬間、「下関、出ました。お話し下さい！」と女の乾いた声が出た。「えっ！私はこれから鳥取にダイヤルする所ですが……」と云い返すと、交換手は「おかしいで

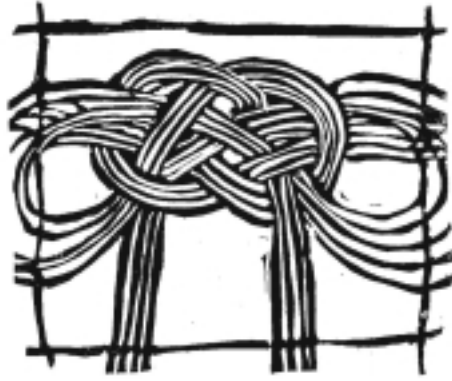
すね。あなたがボックスに入る前に誰か居ましたか？」「はい。男の人が出て行かれました」と私。ちよつと間があつて「その方はどこへ行つたのですか？」「さあ、知らない方ですから……」その次の彼女の言葉に驚いた。「では、あなたが探して下さい！」私は息を呑んだ。その命令口調に、私は動揺して、「あつ！探してみますッ」と云い放つてホームに戻り「先程、下関に電話された方あ、いませんかあ」と降りしきる雪の中を走つた。停車のままの列車が黒々と眠っている。あ、これは下り線だから、上りの客かも知れないと合点して階段を昇り降りして走つたが気がない。元のボックスに戻り「探しましたが見当たりません」私の声はかすれていた。交換手の息遣いが明晰な声で「居ないというのは困ります。判りました。では、あなたがお話し下さい！」「えっ！……」

「うん、判らんけど」と答える。「まあ、ゆつくり来たらしいわ、氣をつけてな、待つとるから」と老女の電話は切れた。交換手が出た。「通話終わりましたか」「はい」と私。「ありがとうございました」と彼女の声も消えた。私は茫然と電話を置いた。春先になる毎に、私はこの出来事を想い返している。あの交換手は、理知なのか、冷徹なのか。四十二年も前の事だから、もう生きてはいないかも知れないし、生きているかも知れない。下関の老女とは「話」をしたので、もう会つて終つていない、夜の日本海の波飛沫も見えた思いがあるのだ。交換手の方はまだ間の奥のままである。見知らぬ老女と見知らぬ男の回線を接続した後の彼女は、交換機の前で読みかけの本の続きにでも移つたのか。或いは耳を澄まして私達の会話を聴いて納得したのであるか。それにしても彼女の命ずるままに、駅の下上を走り連呼したり、老女の縁つづきの男の代行で下関弁で話を合わせたりするのは、一体何事であつたのだろう。

交換手が今生きているなら、名前などはどうでもいい。こちらも名乗る事も決まらずにそのままに、ただただその横顔をゆつくり凝視してみたいものだと思つている。

龍馬賞いたただき物語

by やまげんらう



龍馬賞というのは、毎年十一月に高知の報道機関十二社が選考し、坂本龍馬のスピリッツを継ぐ高知ゆかりの団体もしくは個人に贈られる賞である。日本中が龍馬ブームに沸いた去年、それを受賞したのは『日本国憲法前文・お国ことば訳』代表。まさかのワタクシやまげんだった。

十月下旬、みーたのクラスがニラ畑に来て、イトウ家の作業場で実習をしていたとき（前号を参照）、子どもたちの歓声をバツクに携帯電話で龍馬賞基金事務局というところから受賞の連絡を受けた。関係者から前説明を受けていたので、少しは気の利いた受け答えをしたかったのだが、アワアワとなり、頭を下げなが

ら「ありがとうございます」を繰り返した。そしてニラ見学が終わって一息つくくと、今度は焦りと不安（詳しく言うところ、着て行く服がない。謝辞を考えにやいかん。一人で会場に行くのが怖い）などが津波のように襲ってきて、しばらく浮かれたり沈んだり落ち着きのない人になっていた。

三、四日してやっと冷静になった私は、出版社の担当編集Kさんに（前々号を参照）一緒に授賞式に出てくれませんか、と持ちかけた。窮地（？）を楽しむための道連れ要請である。大変忙しいKさんだが、出張先の青森から東京に帰らず高知へ飛んできてくれることになり、本づくりで世話になったデザイナーFさんも来てくれることになった。（ちなみに、二日前から早々と高知入りしたKさんの手には釣竿が握られており、式の前日は英魚とふたり海で糸を垂れていたことをあえて書く。）十一月十五日当日。会場である高知市内の水テルに着くと、受付で『受賞者』の札がついた大きな花をつけられた。横を見ると同行二人にも同

じ花がついていた。式が始まって、賞状を受けた後、謝辞を述べるためにマイクの前に立った。会場の人たちが皆こつちを見ていた。『お国ことば訳』は、ついでこの間まで超マイナーだったのに、こんな日が来るなんて。これまでの六年間が頭に浮かぶ。昨晚、必死に考えたお礼のことはやつと魂が入った。（ただし後に続いたKさんの挨拶のほうに客席にウケていたが。）

夕方、家族と茶の間でニュースを見た。授賞式の様子が映ると子どもが歓声を上げた。すかさず「おかあさん、化粧がハデ」と、みよみよこ。英魚は、海でKさんから「奥さん、緊張して大変じゃない？」と聞かれ、「全然。楽しみにしてるみたいですよ」と答えたと言った。みーたはその晩の日記に「ぼくのおかあさんはなんと今日、ひょうしょうじょうと賞金をゲットしました」と書いた。しばしば非日常的な場面に右往左往する私は、その度に家族のブレない自然体に救われる。

（香南市在住）

寄贈図書紹介

ありがとうございます

蘆ベルトラン、ぼくの伝えたい百の物語／岡本健治&フォン・グリフ・ベルトラン 蘆本は、これから／池澤夏樹編
蘆あたらしい憲法のはなし／日本平和委員会 蘆本・ほん・ホン4074／4199／HOKKI



激ハ千二コからタンギルキ

ペット観も異文化衝突

—キルギスペット事情—

氏原名美



うじはら なみ
高岡郡越知町生まれ / 北大でロシア語を学ぶ / 2001年からキルギス在 / 国立ピシケク人文大学日本語日本文学科学科長)

「日本人はイルカを食べるのか」と友だちに聞かれた娘の亭主、「我々にとつての羊のようなもんだ」と答えたなら、「羊はおれたちがエサをやつて育ててやつたんだから、食べて当然イルカはそつじやないからダメ」と返されたそつだ。

彼の論に従えば、クジラやイルカどころか、漁業どころか狩猟採集全面禁止、海の幸山の幸は養殖の魚か植物でさえ畑で育てたものしか食べられないことになる。暴論をなじりたくなるが、なにせ海を知らないキルギス。なじみの薄い海洋生物に対しては仕方がない。シー・シパード顔負けの文化的唯我独尊になつてしまつた。

しかしキルギス人は、太地町のイルカ漁に監視の目を光らせるその種のボランティア・グループとは異なつて、近代ヨーロッパ的動物愛護とは無縁だ。イルカ漁にしても捕鯨にしても、残酷だから断固反対などと血相を変えることはない。むしろ、遊牧生活を離れてまた日が浅いせいか、動物をペットとして遇することはない。基本的に犬は番犬、猫はネズミ退治都会では、犬は鎖に繋がれてもつぱ

ら吠えるのが仕事、猫を飼つ家はそもそも少ない。「ねこつ可愛がり」といつ表現が存在しないのがキルギスだ。我が家の末つ子が尿石症になつた。末つ子とつても娘の飼ひ猫のことで、一歳半になる。三匹生まれた末つ子で、兄と姉はもらわれていき、日本とは逆の末の息子が親元に残るキルギス式よろしく、未だに母猫と同居の身だ。里帰り出産でキルギスを留守にしている娘に代つて世話をしているが、その末つ子がある日突然の尿詰まり。慌てて獣医のところへ駆け込んだ。

ドアを開けたら飼ひ主に抱きかかえられた患者が何匹も待つている。うちの点滴をしてもらっている間にも次から次へ絶え間がない。不安げな飼ひ主の十人のうち九人までがロシア人。キルギス人はペット病院とは無縁のそつだ。待つている間、保護者同士で、「お毛は？あらか食欲がないの、心配ね」「何か月？」「か月？おとなしくしてお利口さんね」「この子は注射でよくなつた、その子も心配ないよ」といふような話が続く。まるで小児科の待合だ。

うちの、よくなつたりぶり返したりで三週間、やつと、特別食を与

えながら様子見をいつことになつた。最初の数日は添い寝をしても心配で、夜中に何度も目が覚めた。いつもは、「邪魔、邪魔」と言つて椅子から追い払つたりするが、「ボク、ボンボン痛いの」と言つような目で見上げられると、ネコも人の子も同じ、心配でならなかつた。おかげで、以前に増して甘えん坊にしまつたが、よくなつてくれたのが何よりうれしい。

一方、友人のイルカ漁批判に対して異文化論の立場で異を唱えてしてくれた娘の亭主だが、一人で受診の付き添いをさせられ、本音が出た。「猫」ときに点滴に注射、薬に高い療養食なんて、恥ずかしくて親類にも友だちにも話せない。獣医に連れてくる人も、男のくせに女みたいな心配顔。あんなにはなりたくない」と鼻の穴をぶくらませて言つ。男の沽券ごもつとも、とは思つもの、初孫にもうすぐ会えると楽しみにしていただけに、我が子のときにはそんな邪険は言わないで、と心の中でお願ひした次第。



わが家の太郎 筈

性格

永野 雅子



太郎もやつと私との生活に慣れて、一応主と一目置いてくれるようになったが、それでも気に入らないことがあると突然吠えかかったり、よその犬に挑戦的になるので太郎を譲ってくれた夫の友人に相談すると、「それじゃ去勢をしたほうがいいだろう。獣医さんに相談してみたら」とのこと。

私ひとりでは病院へ連れて行くのは初めてで、恐る恐る車の助手席を開けると、喜んで飛び乗ってきた。運転している傍らで太郎は私の顔をペロペロツ。気になって集中できない。

やつと病院に到着して、驚いたことに待合室は犬や猫を連れて来た人で一杯。

受付をしている間に太郎はカウンターの端におしっこをびゅつ。

見ればどのワンちゃんもおとなしく飼い主の傍でじっとしているでは

ないか。その中で太郎は、あちらにワン、こちらにワンと落ち着かないこと甚だしい。皆の視線を感じて仕方なく外へ出る。

やつと順番が来て診察室に入ると「体重を量りますからこの上に乗せてください」と、助手の女性。

「エッ、私が？」

初めて太郎をこわごわ抱いて診察台へ。そこでも口輪をはめられる。獣医さんから

「散歩の時あなたのそばを歩きますか？」

「いえ、私の前を右へ左へ走ります」

「それはいかん。きちんと飼い主の歩調に合わせて歩くようにしつけてください」

「食事は栄養のバランスがとれるドッグフードだけにするように」

「待て、良しが出来るまで安易にえさをやらないこと」

聞いているため息が出る。

ま、去勢とやらをすれば少しは太郎も変わるだろうと手術の予約をして帰った。

四日ほど病院に入っていよいよ退院の日。

迎えに行くと、太郎はさすがに私に向かつて前足をあげうれしそうなポーズ。

診察室で先生曰く、

「手術は問題なく済みしました。これで男の本能的なものはなくなりますが、性格は変わりません。あとはしつけてください」

やれやれ。

(ながの まさこ / 飛鳥常務取締役)

東日本大震災の報は、瞬く間にキルギスにも届きました

何とかして日本を応援したいと思ってくれている人がたくさんいます。在キルギス日本国大使館には三月一日の夕方から、土曜も日曜も月曜客が絶えず、館員も土日返上です。大学の学生たちも日本語を学ぶのが中心となってチャリティーのバザーやコンサートを開いて募金活動を始めています。「身寄りを失った子供がいるなら、すぐにでも引き取りますよ」と真剣な顔で言ってくる人たちもいます。私も、同僚や学生たちはもちろん、普段は余り連絡を取り合うこともない知人から声をかけられたり、心配する電話をもらったりしました。

……(中略)……

実際に迫った弁論大会の練習をしていた時、四年生の男子が「先生、今日日本に行ってる人は、殆んどが日本の奨学金で勉強してますね。日本が危なくなつたから、すぐに国に帰ります、ではあまりに無責任で情けないです。残つて何か手伝えることがあるんじゃないですか、よその国からも手伝いに行っているのに」と聞いてきました。「事態が大変すぎるので、足手まといになるよりは、と思った人も多いと思いますよ」と答えておきましたが、うれしいことばを聞かせてもらいました。

一日も早い母国の復興、人人の心がふたたび元氣を取り戻すことを、遠くキルギスから祈っています。

三月二一日 氏原 名美

印刷屋さんの 「すったもんだ」



情けない話だが私自身あまり活字が得意なほうではない。

印刷、出版という仕事をしていながら恐縮な話である。

20代前半の頃は「電馬がゆく」や本田宗一郎、松下幸之助関連、自己啓発本など色々興味をもって読んでいたが、ここ最近（特に子どもが生まれて）からはかなり読書から遠ざかっている。

それでも、社長と呼ばれるようになってからは流石に経営者としての自覚を高めようと、意識的に読むようにしている。

ここ最近面白いと思ったのが、月並みではあるが「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」（古いかな？）や「利益重視型マーケティングBRM～『人口減少』時代の新しい売り方」などはとても勉強になった。これからもドンドン本を読んで知識を蓄えていきたいのでお薦めの本があればコソコソ教えてください。

UNIVERSAL DESIGN of MEDIA

私たちは誰もが違和感なく見やすい

「メディアユニバーサルデザイン」に取り組んでいます。

私たちは**情報の87%を視覚**から収集しています。そのような中で現在、色覚に異常があり正常色覚者と色の見え方が違う人は、**男性で約20人に1人、女性では約500人に1人**と言われており、その数は**日本国内で約320万人**にもなるといわれます。また、色覚は年齢と共に機能低下し白内障や緑内障も色覚機能を低下させる原因といわれ、全て合わせると**500万人を超える**人々が何らかの形で視覚に障がいを抱えていると言われてしています。

私たちは年齢や身体能力に関わらず、**誰もが違和感なく見やすい「メディアユニバーサルデザイン」**に取り組んでいます。

雑書き

人知を超えた自然の猛威の前で、人は生かされている小さな命だということを知り知るばかりですが、その後に続く人災には怒りと恐怖を覚えます。それでも、人に愛と協調がある限り復興への希望を強く信じます。（河の）

六年前、卒園卒業と入学二つをやったが、今年も卒業二つ、入学二つをやる。準備のため休みのたびに買い物に連れて行っただが、前とは違って親がしてやらねばならぬことは減った。六年前のスーツを出して着てみるとお腹が風船のように丸くなっていて、昔の母の姿を思い出した。自分のうえに時間が流れていくのを感じている。（しま）

占いを信じている訳ではないですが、良いことが書かれていますと気分がいいですよ。ちなみに今日の運勢は「明るく晴れやかな気分の日。何をしてもチャンスに結びつきそう。積極的な行動が、金銭面でのツキを呼び込んでくれる事になりそう。チャンス到来の兆し。自分に大きな目標を持つと良さそう」ですって。うふふ。